

令和元年号

山田宏の
タックル
ニュース

7月1日

令和元年

発行
山田宏よい国後援会
機関紙

自民党



「令和」の時代に、真の自立を 「憲法」「皇室」そして「靖国」

参議院議員 山田宏

「令和」にこめられたメッセージ

ホワイトハウスのある高官が、「新元号で、国民全体が万葉集の時代の1300年前までタイムスリップできる国とは、なんと素晴らしい」と羨ましがっていたという話を聞きました。

これまで元号は漢籍(中国古典)の出典でしたが、令和は万葉集という国書から初めての引用です。出典となった「梅花の宴」を催した大伴旅人(たびと)の子孫、伴真成(ともまさしげ)の娘は菅原道真の母であり、道真は言わずと知れた遣唐使廃止の立役者です。令和という元号制定には、「日本よ、自立せよ」というメッセージがこもっているように、私は思います。

また大伴旅人の息子の家持(やかもち)は、のちに一部が「海ゆかば」という国民歌謡の歌詞となった、万葉集にある自作の長歌「賀陸奥国出金詔書歌」の中で、高らかに天皇への崇敬の念を歌っており、この時代は「国家としての自立」を強く意識した時代でもありました。

今日の日本

「避けてきた」国家としての自立

一方今日の日本はどうでしょうか。国家としてのかたちは整っているように見えますが、真に自立しているかは疑問です。自国の領土で数多くの同胞が北朝鮮によって不法に拉致連行されたまま、わが国は自らの力でも奪還する方策に取り組みず、た



2019年5月28日 トランプ米国大統領夫妻による護衛艦「かが」訪問

だ米国大統領に「助けてください」とお願いし続けるような国が、真に自立した国と言えるのでしょうか。

中国政府にスパイ容疑をかけられ長期間監禁され続けている同胞たちや、毎日侵犯行為が繰り返される尖閣諸島などの領土侵食に対し、「他人事(ひとごと)」のように無関心を決めれば、必ず将来「自分事(わたしごと)」として降りかかってくるということは、古今東西の歴史をみれば明らかです。わが国は、敗戦後その勤勉さと団結力で経済発

展を遂げた一方、目先の経済の対応に追われ、「国家としての自立」「国民の自立心の回復」という独立国としての本来のテーマに対し、正面から取り組むことを避けてきました。その結果が今日のわが国の混乱と行き詰まりをもたらしている、私は思います。

日本の自立の礎(いしづえ) 「防衛」そして「皇室」

わが国が真の自立心を回復するためには、まず第1に、「自分の国は自分で守る」という、どの国でも当たり前の原則を取り戻すことです。自分の国なのに、いざとなれば他国に守ってもらおうという虫の良い考えは、国際社会では通用しません。

しかしわが国は、長く国としてのこの当たり前の原則から目を反らしてきました。憲法は9条1項で「侵略戦争はしません」としながら、侵略された場合の規定はなく、2項と前文で解釈する限りその場合は「他国に委ねます」ということになります。このような情けない憲法で、誇りと自立心あふれる国民が育つわけありません。憲法改正は自立した国への第1歩です。

第2に、国民の統合の「芯」であるわが国独自の皇室が、伝統に基づき安定的に永続する基盤を整えることです。天皇は神武天皇から今上陛下に至るまで、126代にわたって男系(父系)によって継承されてきました。男系とは天皇の父方をたどると神武天皇につながるという「父系」の血統で、これまで一度の例外もありません。

過去には推古天皇など8人の女性天皇がおられますが、みな男系(父系)の女性天皇です。また全員が未亡人か独身者なのは、仮に女性天皇と民間男性の配偶者との子が皇位に就けば、将来天皇の父方をたどると「○○太郎」ということになり、「別王朝」に変わってしまうからです。こんなことは藤原氏や徳川氏



2019年5月21日 衆議院 財務金融委員会 答弁

などの権力者も行わなかったのです。

今後伝統に基づいた安定的な皇室の存続のためには、占領軍が廃止した旧宮家の皇族復帰も検討する必要があります。宮家とは、天皇家に男系(父系)が途絶えそうになった際の補助的役割だからです。さらに現宮家への旧宮家の男子の養子縁組を認めることも検討する必要があります。

英霊への感謝を

第3に、英霊への感謝です。具体的には首相の靖国神社参拝、そして環境が整えば1975(昭和50)年を最後に途絶えている、天皇陛下のご親拝を実現することです。国家国民を守るために尊い犠牲を払われた方々に対し、国として感謝の誠を捧げ御霊安かれと祈ることは、国家としての当然の義務です。先祖や先人とは、今を生きる私たちのいわば「根っこ」です。「根っこ」に感謝し「根っこ」を大事にできない人や国が、「花」や「実」をつけるはずがありません。

わが国が真の自立を回復するためには、敗戦後避けてきたこれら「憲法」「皇室」、そして「靖国」の3つの課題に正しく向き合うことが必須です。そして「国家としての自立」が回復されれば、国民の中に力強い「自立心」が生まれ、それが源となって教育や経済に大きな活力を生むことに違いありません。

「世界乱世」とも言える新時代だからこそ、御代代わりに当たって、わが国は戦後70年間の歩みの中にある根本問題に、そろそろ取り組む時期にきたと思います。

